

生活の問題を見だし、主体的に解決する力を養う授業を目指して
ー 効果的な学び合いの場の設定を取り入れた授業づくりを通して ー

塩竈市立第一中学校 今野 房子

1 目指す授業像

- (1) 生徒が学びのつながりや必要性を実感し、主体的に学習活動に取り組む授業
- (2) 生活を客観的に捉え、消費生活に関する課題を見だし、解決しようとする実践的態度が育てられる授業
- (3) 学び合う場面が効果的に設定され、生徒が級友と共に考えを広めたり、深めたりすることができる授業

2 研修テーマ・目指す授業像に迫るために

本校は、技術・家庭科の学習に意欲的に取り組む生徒が多い。しかしそれは、調理や布製作など実習を伴った学習活動の場面に見られるものである。一方、消費生活と環境の学習への関心は低くなっている。これは、生徒たちが家計の主体者ではないため、消費者としての自覚が育っていないことから、消費生活の仕組みに目を向ける意識が低く、学びの必要性が感じられにくくなっていることが原因と考える。加えて、近年、消費者被害の低年齢化に伴い、消費者被害の未然防止や適切な対応が一層重視されている。このことから売買契約の仕組みと関連させて消費者被害について取り扱うとともに、持続可能な社会の構築に向けて、消費生活と環境を一層関連させて学習ができるようにし、消費者市民社会の担い手として、自覚をもって環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎を培うことを目指したい。

本主題は、新学習指導要領の指導内容「C消費生活・環境」に位置付けられ、身近な消費生活と環境についての課題を主体的に解決する力を養い、身近な消費生活と環境について工夫し、創造しようとする実践的な態度を育成することをねらいとしている。具体的には、三つの手立てを講じ、研修テーマに迫る。なお、評価については現行の学習指導要領の観点で行うものとする。

3 I期の取組について 【題材名 「身近な消費生活と環境 2 商品の選択と購入」】（開隆堂 技術・家庭科 家庭分野）

(1) 研修テーマに迫るための手立て

生徒に「消費生活は身近なものである」と気付かせることを主眼とした授業を展開した。生徒が、授業の中で得た知識を家庭生活のどの場面で生かすことができるのか具体的にイメージできるよう、学習活動の一つに疑似体験を取り入れた。さらに、小学校の学習や中学校家庭科分野の食生活、衣生活・住生活での既習事項を想起できるものを教材・教具とし、生徒が学びのつながりに気付けるようにした。疑似体験の後には、意見交換や相互評価を行う学び合いの場を意図的に設け、自分の考えを伝え、他者の考えを聞く活動を取り入れることで、意見の共通点や相違点から身近な消費生活における課題を見いださせたいと考えた。

(2) 具体的な手立て

① 学びのつながりや必要性を実感することができる課題の提示

学習課題として誰もが経験している「買い物」を取り上げた。生徒が日常生活において当たり前のように行っている行動が消費生活の課題として提示されることで、消費生活の学習を身近なものと捉え、学んだことを家庭生活に直結させることをねらいとした。また、購入する商品として、生鮮食品や衣料用洗剤、味噌などを提示した。これは小学校や中学校家庭科分野の

食生活、衣生活・住生活などで学習した内容とつながるものである。これまでの学習で得た知識や技能を生かしながら学習活動に取り組むことで、生徒に学びのつながりや必要性を実感させることができると考えた。

② 体験的な学習活動

学習した内容を活用する場面を具体的にイメージすることができるよう、疑似体験活動を行った。教師側が意図的に設定した家族構成をグループごとに提示し、家族構成ごとに家庭生活の中でどのような問題や課題があるかを書き出させてから商品選択を行った。その後、「自分なら家族のためにどの商品を選ぶか」という問い掛けをし、自分の家庭生活に目を向けて考える場を設けた。注）ここで取り上げる「疑似体験活動」とは、特定の立場や状態に似せた環境を教師側が準備し、実際にその立場や環境に置かれたと想定して体験学習を行うこととする。

③ 話し合い活動

商品選択の疑似体験を終えた後、1回目は同じ家族設定で活動した生徒たちと、2回目は異なる家族設定で活動した生徒たちと、合計2回の意見交換の場を設けた。自分の意見の他にも級友の意見をメモする枠をワークシートに設け、意見交流で得られた情報を、その後の自分の家庭生活に還元させる際の有効な情報として残せるようにした。情報交換を通して、自分の商品選択の視点（欲しいもの）の偏りや、新たな商品選択の視点（必要なもの）に気付き、考えを深めることを期待した。

(3) 成果と課題（○成果、●課題）

① 学びのつながりや必要性を実感することができる課題の提示

○ 「買い物」という身近な題材を取り扱ったことにより、多くの生徒が現在の生活体験を基に意欲的に学習活動に取り組むことができた（図1）。

○ 小学校の総合的な学習の時間で学習した「味噌」や家庭分野の食生活・衣生活で取り扱った「洗剤」、「食品」等を提示したことにより、既習事項を振り返り、その際の学びで取り上げたキーワードをワークシートに記載している生徒が見られた。



図1 商品を選択する様子

② 体験的な学習活動

○ グループごとに家族構成を設定したことにより、商品選択の視点が明確になり、意図的に設定した家族構成に合った必要な商品を探し出そうという姿を見取ることができた。

○ 実際の自分の家庭に視点を変えて考える場面では、家庭生活を客観的に見詰め、家族の特徴や抱えている問題等と比較検討し、商品選択をした生徒が確認できた（図2）。

Q. 自分だったら…?						
	挽肉	衣料用洗剤	お茶	野菜	味噌	電池
選んだ商品	3	4	2	4	2	2
〔理由〕挽肉と衣料用洗剤と野菜は人数が多いので、量がなくて安い物を 選んだ。お茶にこだわりがある人はいないので、ペットボトルではないものを選び、味噌も 味噌は味が好きな人がいるので、シロカキのものを選びたい。電池は便利だから、 家でよく使っているから、家で選んだ。						

図2 自分の家族を想起しながら商品を選ぶことができた生徒のワークシート（抜粋）

● 回収したワークシートの中には「将来に役立てたい」という感想の記入が数名見られた。将来だけでなく、今の自分にも実践が可能であると感じる学習課題を、生徒の実態に応じて提示しなくてはいけないと思った。

③ 話し合い活動

- 商品の選択では、購入の目的に沿った商品は複数あるが、好みや価格だけでなく、商品の情報を読み取りながら、品質・安全性・機能・保証・アフターサービス、環境への影響を考えることができた生徒がほとんどであった。環境について触れたことについて、教師側が全体で取り上げ、その視点の重要性について説明を加えることができた。
- 商品選択の活動をグループで行ったことで、設定した家族が重視すべき視点について活発な話し合いをする姿を見取ることができた。また、グループで商品を選ぶという活動は、生徒個人が忘れていた既習事項を級友の意見から思い出すきっかけになった事例も確認することができた（図3）。

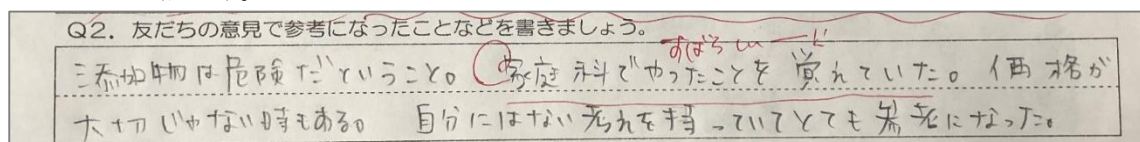


図3 他者の意見が参考になったと答えた生徒のワークシート（抜粋）

- 商品選択後の情報交換の場では、家族構成の違いから、導き出された答えが複数あることを実感することができ、自分の家庭生活を踏まえながら消費行動をとることの重要性に気付くことができていた（図4）。

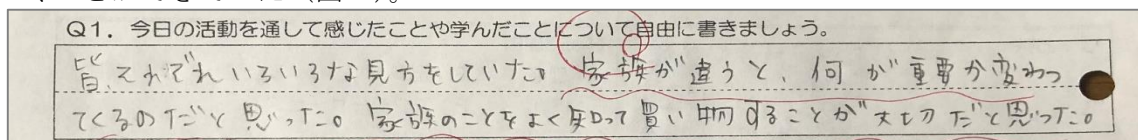


図4 自分の家庭生活を振り返る重要性に気付いた生徒のワークシート（抜粋）

- 他者の意見を取り入れることの有効性について実感できた生徒とできなかった生徒に分かれてしまった。より多くの生徒が学び合いの有効性を実感させられるような工夫を取り入れていきたい。
- 今回の活動は出席番号順に機械的に作成したグループであったため、話し合い活動が活発に行えたグループとそうでなかったグループとが生じてしまった。どの学級・学年にも対応することができるよう、話し合いの題材や指示の出し方、支援の仕方について検討していくことが必要であると感じた。

4 II期の取組について 【題材名 「身近な消費生活と環境 3 よりよい消費生活のために」】（開隆堂 技術・家庭科 家庭分野）

(1) 研修テーマに迫るための手立て

II期の取組では、消費者としてよりよい社会を構築する一員として、消費行動をとる役割があることに気付かせることを主眼とした授業を行った。I期に引き続き、学習課題は他の内容と関連付けて考えることができるものを提示し、学びのつながりや必要性を実感できるよう試みた。しかし、それだけでは学びの必要性を感じる生徒を見取ることが難しかったため、II期では、生徒たちに本時のねらいを具体的に提示し、見通しを持って生徒たちが活動に取り組むことができるよう心掛けた。また、消費者の基本的な権利と責任に関する基礎的・基本的な知識を身に付けた上で、消費生活が環境や社会に及ぼす影響についての理解を深め、自立した消費者としての責任ある行動を工夫することができるよう、I期で学習した内容も確認しながら思考することができるストーリー性のある授業展開とした。I期でも有効な手立てであった疑似体験につながる手法を今回も効果的に取り入れ、生徒たちが学習内容を家庭生活と直結させることができるようにすることで、実践的な態度の育成を図った。学び合いによる思考の広がりや深まりを持たせるためグループの構成を見直すだけでなく、ワークシートの活用方法についても改善した。

(2) 具体的な手立て

① 学びのつながりや必要性を実感することができる課題の提示

本時は家族生活の学習と関連を図ることができる題材として、塩竈市で実施した「赤ちゃん」と中学生ふれあい交流会に参加したときの映像を導入で提示した。生徒が乳幼児と触れ合った体験を想起することで、消費者被害の深刻さがより現実的に感じられ、安全・安心を脅かす商品はその後大きな消費者被害に発展するということを実感できるようにした。また、導入時に「消費者被害を未然防止する」という授業のねらいを明確に提示し、生徒たちが学習活動に見通しを持って取り組むことができるようにした。

② 体験的な学習活動

I期で有効な手立てとなった疑似体験活動を本時も取り入れた。I期で行った買い物の疑似体験活動では、計画や情報収集などの事前準備を行わなかったのに対し、今回は消費者としてどのような行動をとるべきなのかをロールプレイングの手法を使い、一人一人が事前に考え、検討する時間を設けた。また、実際に社会で発生し、話題になった消費者被害を事例に用いることで、消費者被害の未然防止という課題に対して、より使命感を持って臨むことができるよう工夫した。注) ここで取り上げる「ロールプレイングの手法」とは、現実のある場面を想定し、複数の人間がそれぞれの役を演じながら適切な対応を試みる「役割演技」に関する学習方法のこととする。

③ 話し合い活動

ロールプレイングの手法を実施する前に、各自でシナリオを作成した後、役割が同じもの同士、異なるもの同士で内容を検討させ、様々な立場で物事を捉えたり比較したりするなど、意見交換ができるようにした。また、周囲の意見で参考になったものを色ペンで書き加える作業を取り入れ、他者の意見が自らの視野の幅を広げ、思考を深める一助となることに気付くことをねらいとした。I期で人間関係やレディネスのばらつきにより意見交換が活発に行えないグループがあったことを踏まえ、活動グループは、学級担任が生徒の人間関係を配慮して作った生活班を併用し、円滑に話し合い活動に取り組むことができる環境を作った。

(3) 成果と課題 (○成果, ●課題)

① 学びのつながりや必要性を実感することができる課題の提示

- 自分たちが参加した「赤ちゃんふれあい交流」で感じた乳幼児のか弱さや親が子に向ける愛情を想起しながら活動したことにより、多くの生徒が「消費者被害を未然防止する」という課題について真剣に考えることができた(図5)。
- 具体的な「消費者被害を未然に防止する手段」について考える際は前時までに学習した商品選択の視点や消費者の責任と権利を参考にして話し合う様子が見られた。



図5 被害対応の活動の様子

- 「今の自分にできることは？」という問いに対し、今までの自らの消費行動を振り返り、具体的に実践できる内容を挙げる生徒が多く見られた。

- 衣食住など他の内容との関連を教師側が提示した場合、生徒たちは学びのつながりや必要性を実感することができたが、自発的に気付くことに対してはまだ課題があった。

② 体験的な学習活動

- 消費者被害を未然防止する手段について考える場面でロールプレイングの手法を用いたことにより、「店舗に相談する(行動を起こす)」という正解を導くことができた。しかし、どのように伝えるべきなのか、具体的な話し方などについて試行錯誤をする姿が見られ、行動に移すことの難しさを実感する生徒が多くいた。

- 消費者としてどのような行動をとるべきか事前に考えたことで、ロールプレイングの活動に見通しを持つことができ、自信をもって参加する生徒が多くいた。また話し方や表情も豊かになり、現実に近い形で再現することができた（図6）。



図6 活動に取り組む様子

- 本時の学習活動は、他者とコミュニケーションをとることが苦手な生徒にとっては意欲的に取り組むことが難しい課題であった。シナリオは作成できていても、「実際に行動に移す」という行為に恥じらいを覚え、前向きに活動することが難しい生徒が出てしまい、うまく支援することができなかった。

③ 話し合い活動

- 一人ではシナリオを作成することが困難であった生徒が、意見交換で友人の意見を参考にしたことで、シナリオを完成させることができた。
- 意見交換の実施により、個人で考えたシナリオを深めることができた。また、他者の意見を加える際に色ペンを使用したことで、他者の意見が自分の考えをより良いものにしていると実感することができた生徒が多かった。
- 活動グループを人間関係が配慮された学級の生活班と併用させたことで、どのグループも活発な意見交換を行うことができた。

5 1年間の総括

(1) 研修の成果

① 学びのつながりや必要性を実感することができる課題の提示

アンケートから、身近な消費生活と環境の授業を通して、家庭生活における衣、食、住、家族と消費生活の「つながり」を感じることができたと答えた生徒が研修前と比較して2割増加していることが分かった。よって、家庭生活を総合的に捉えるなど、本研修は生徒の家庭生活を見詰める視野を広げる契機にすることができたと考える。またⅡ期の取組で、生徒に見通しを持たせ、課題を明確にしながら学習活動に取り組ませたことで、学習活動に意欲的に取り組み、学びの必要性を感じている姿を見取ることができた。この気づきにより生徒たちは、消費生活において自分の考えに自信を持ち、主体的に消費行動をとることができるようになっていくと考える。

② 体験的な学習活動

生徒たちは消費者としての自覚がないままに消費行動をとっていたが、授業の中で疑似体験活動を行ったことで、他分野の内容と同じように消費生活でも既習事項を活用する場面を明確にイメージすることができた。また消費生活のまとめを行った際のワークシートには、消費者としての自覚が生まれ、家庭生活をよりよくするだけでなく社会を構築する一員として行うべき消費行動を具体的に挙げられる生徒が増えてきた。金額の大きい買い物やクレジットカードの使用など消費行動の中には既習事項をすぐに活用できないものもあるが、自らの言葉を使い消費者として必要な知識やとるべき行動についてワークシートに書き記したことで、消費生活に目を向け、消費者としての自覚を高めることができたと考える（図7）。

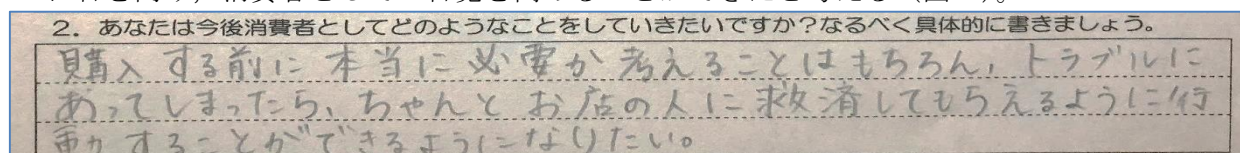


図7 消費行動をイメージした記述

③ 話し合い活動

生徒が自らの考えを深めたり、視野を広げたりすることを目的として取り入れた学び合いの場の設定は、他者の意見が自分の考えを深める一つの手立てとなることを実感した生徒が多くいることから、有効であったと考える。しかし、効果的に学び合いを成立させるためには、グループ構成に配慮が必要であることも分かった。本研修ではⅡ期の授業を実践する際に、各学級の担任と連携を図り、人間関係を考慮した学級でのグループを利用した。これにより話し合い活動が円滑に進み、生徒たちの満足度が高い授業にすることができたと感じている。また、学び合いには個々の生徒の基本的な知識や技能の定着も重要である。今後は知識の定着を図る工夫も行っていきたい。

(2) 今後の課題

今回の取組により、生徒たちは消費生活・環境の学習を身近に感じ、消費者としての自覚も高まってきたと思われる。しかし、実際に家庭生活において生徒たちが消費者として自覚しながら消費行動をとることができているのかの確認については、一部の生徒たちの報告のみにとどまってしまった。このことは、教師側が家庭生活で実践するための具体的な手立てを講じなかったことが原因であると考えられる。他の内容と比較し、「消費生活と環境」に関する興味・関心が低かったという実態を踏まえるならば、生徒たちの自発的な行動に頼るのではなく、買い物の実践レポートを作成させたり、自らの消費行動を振り返り、見逃していた消費者トラブルがなかったか確認し、未然防止する手立てを考えさせたりするなどの学習過程を課すことで、研修テーマにより迫ることができたのではないかと考える。

また本研修では、生徒が総合的に家庭生活を捉え、学びの必要性を感じることができるよう技術・家庭科の教科内での関連付けや小学校の内容との系統化を図ってきた。今後は、社会科や保健体育科などの他教科との関連や、高等学校の内容との系統化も試み、消費生活のつながりを社会から地球環境へと広げていくことが必要であると考えた。よって、次回は広い視野で環境にも配慮した消費行動をとることができる手立てについて考えていきたい。加えて、エシカル消費の視点から、責任ある消費について意見を交流させる場を設けるなどし、社会や環境とのつながりに配慮した消費行動を行うことが、持続可能な社会の構築につながると考える。今後は環境の内容も踏まえた学習課題や活動について考案し、持続可能な社会の担い手としての自覚を持ち、環境に配慮したライフスタイルの確立の基礎を培うことができるよう努めていきたい。

主な参考文献

- [1] 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭科編
- [2] 文部科学省：中学校学習指導要領（平成20年告示）解説 技術・家庭科編
- [3] 小林宏己著：「授業研究27の原理・原則 ―授業力向上のための実践的思考―」 学事出版 2013

図表等の許諾について

図1, 5, 6は授業実践の中での生徒の様子である。生徒が特定できないようにすることとし、生徒の保護者から使用許諾を得た。また図2, 3, 4は生徒が記述したワークシートを一部抜粋したものである。生徒名を伏せて資料を活用することとし、生徒の保護者から使用の許諾を得た。